≪　補足説明　≫

◎発表者　山根浩明先生

一点だけお願いします。レジュメの９Ｐにもあるんですが、新学習指導要領の「３論理国語」の「３内容　○語彙のところに「イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること」とあります。実際には何個か具体的に、「こういうのを身につけた方がいいよ。」というのが指導要領の中に載っております。そこに「示唆」という言葉がありまして、生徒の中にもわからない言葉、つまり、未知の語彙としてですね、出てきていたので、私の方からも、「これは身につけた方がいいんじゃないかな。」ということで提示させてもらいました。生徒が挙げてきたもの、最終的には生徒が決めるんですが、１０個選ぶという過程の中で、私の意見といいますか、「こういうの身につけた方がいいんじゃないか。」と私の方も１０個提示させてもらって、そこから選んだ生徒もいますし、もちろん、私が選んだ十個が使用語彙の生徒もいましたので、自分たちで考えて選んだ生徒もいました。この１０個にできるだけ根拠があるように、新学習指導要領の中から選ばせていただいたということを、最後に説明として付け加えさせていただきます。

≪　質疑応答　≫

◎笠井大輔先生（城南高校）

語彙の獲得について継続的に実践なさっていて、大変勉強になりました。自分自身が語彙の指導をするにあたって、すごくつまづくというか、悩んでいるのが、「語彙を使えるようになって言葉の意味が辞書的にわかっているだけだと不十分だ。」と思うんですよ。意味がわかったからといって、生徒が作文でそれを使ったときに、「その言葉は使えるタイミングが限定されていて、こういう文脈ではあまり使わないんだよな。」というのは、私たちはわかるじゃないですか。「その単語の手前とか直後にきてる助詞が微妙に違うな。そういう助詞で挟むことはあまりないな。」みたいなのがあって、そこを生徒が自分で判断できずに作文に書いてきて、「いや、そうではないよね。」っていうところを、どうやって修正するのかって、いつも困るんですよね。本当は、一人一人にそのことについて、丁寧に話してあげたらいいと思うんですけど、時間もないっていう現状あるじゃないですか。今回、山根先生が発表してくださった実践の中の、一番最後の実践は、「時間がかかってしまった。」ということをおっしゃっていたんですけど、言葉の語彙を意味含めて使って、「ポスターを作る」っていうことの間に、調べ学習があるんですよね。環境問題のようなことを調べて、いろんな記事を読んだんだと思うんですよ。この「言葉の意味を知る」ということと、「自分が何か書く」ということの間に「調べ学習」が入っているということに価値があると私は個人的に思っていて、そうやって調べて、大人が書いた記事と文章を読む中で言語に触れるわけですよね。「ああ、この言葉って、こういう文脈で使うんだな。こういうふうな前後関係で使うんだ。」ってことがわかるので、その過程こそが、その単語を、語彙を、ちゃんと使いこなせるようになるという成果にすごく機能しているんだって思っていて、そこがいいと感じました。自分自身が困ってるので、すごく枝葉のことを聞いてしまって恐縮なんですけど、山根先生は「この語彙って本当は意味としてはわかるけど、この文脈ではあまり使わないんだよな。」とか、「こういう前後関係、助詞関係について、使うもんじゃないんだよな。」という点について、どういうふうに指導されていたかという点について伺いたくて、例えば、資料の１２Ｐにあるルーブリックの中でも、評価基準の一つに「自分たちの選んだ語句を正しく使えている」という項目があって、「辞書的な意味であてはめていたら正しい、いや本当はそういうのに使わないんだよな。」みたいなのが

あるじゃないですか。そういうところについて、山根先生が実際、生徒たちにどういうふうに指導しているかという点について、聞かせてもらえたらと思います。

◎山根浩明先生

ありがとうございます。笠井先生は昨年度まで川島中高で、一緒に勤めさせていただいて、先生のご意見も、この発表の中に非常に入っております。一緒に手伝っていただいた仲なんですが、この今年やったルーブリックの中を正しく使えている、文脈的な意味で正しく使えているというところで、これ、例外になってしまうんですけど、私が小学生の時にですね、「漢字を日記の中に何個使うか」を競うみたいな月間がありまして、例えば、子どもなので、自分のことを「僕」とか「私」とか書くところを「自分は」って書いてみたりして、「頑張って１文字稼ぐ」みたいな経験があったんですけれども、まあ、彼らと一緒で、使わなきゃいけないから無理矢理使っているんですよね、実は。今回の作品例はよく見ていただいたらわかるんですけれども、非常に破綻しているところもあります。で、もう一回、発表などで返して見てもらうという中で、「これほんとに正しく使えているのかな。」と思うところはあるんですけど、生徒は素直なんで使いたいから、「いっぱい使った。」って言って頑張って、これ結構難しいんですね。Ａ４一枚って制限があるので、書けても１０００字くらいなんですよね。だから８００字とか。だいたい８００字に収めるって実は難しかったみたいで、その中で１０個使うって、難しくて、だからこういうのでＯＫにしたんですけど、やっぱり、なるべくここで使いたい中、いろいろ工夫していたので、そこを正直に書きなさいと言うようにしました。今回、やってみて、それは非常に良かったかなと思います。「スコラ」っていうのも使ってるんですけど、毎日ではないですけど、毎週、毎週、一回、手帳みたいなのを生徒と交換しています。他にも「野球ノート」とかもあるんですけど、野球の試合終わったら、毎回出してきます。もちろん、そこで、いちいち面倒ですけど、直してあげるのが一番早いのかなという気はしています。やっぱり、テストとかは本気で書くので、意外と間違いは無かったりするんですけど、日記帳とかは適当に書いてくるんで、そこで地が出るというか、国語科ではないと思いますが、そういうことの積み重ねなのかなと思ってますし、本気でするんだったら、ゲームみたいな感じで、今回みたいに制限をかけて、ゲーム形式にしてあげると、生徒は頑張るんじゃないかと勉強になりました。どうもありがとうございました。

◎吉田道雄先生（阿波高校）

有意義な発表ありがとうございました。大変興味深く聞かせていただいて、面白いなあと思いました。特に最初のおとぎ話のリライト、『羅生門』の、こういうの使ってというのは、実際に記述を読んでいて私もにこにこして、「生徒の創造性というのはやっぱりすごいものがあるな。」と感心させられました。一点質問と、もう一つ３Ｐのリライト『うらしまたろう』というところで、先ほどの「単語をたくさん使う」ところにつながってくる、上の段の５行目くらいですかね。「そこで、竜宮城の過ごし方は一通りではない。」この、「一通りではない」という使い方がどうも「普通ではない、尋常ではない」という意味ですけど、どうも、そう思って使ってないのではないかなと思ったんですよ。このあたり、指摘されたり、添削したりされたのかという一点と、指摘すべきだという意味ではなくて、それがあったのかということと、あと、１Ｐの方ですかね。「論理国語」の方で、「とても面白くてすごくいいなあ、参考にさせていただきたいなあ。」と思ったんですけれども、「時間がかかりすぎてしまった。」と、「調べ学習の時間が総合的な探究の時間のようになってしまい」

と、「これほんと、国語なのか。」と中程に書かれてるんですけれども、これは質問というよりも、私の素朴な感想なんですけれども、総合的な探究の時間とコラボすればいいのかなと思って。担当の先生と相談をして、調べる時間とか、ポスター作る時間を総探の中に入れてもらう。ただ、その語彙の選定は国語の時間にやるというようにすると、すごく時間をとられすぎることもなく、目的を達成することができるかなと。カリキュラムマネジメントのすごくいい実践になるのかなと思いました。

◎山根浩明先生

ありがとうございました。まず一点目なんですけど、添削まではできていないのが事実です。この後テストもありまして、採点もありまして、もちろんこの後で振り返り学習もしております。「これはこういうのではないよね。」とか、生徒はちょっとできる子で、後で話をしたんですけど、実際、全員のを添削するのは無理でした。彼らも、『羅生門』の表現を使いたくって無理してるんですよね。そこが導入だったので、あえて、「あまり言うと面白くなくなるかなあ。」と思って言っていませんし、時間的な都合もあって、１００人分のリライトを添削するのは難しかったので、できてないんですけども、私も非常に勉強になりました。「なるほど、こんなに頑張って使ってたんだ。」と思いましたし、「無理して使ってくれたんだな。」とも思ったので。でも、これも使い方かなと思います。導入としてはこれでいいのかなと。この後、評価とかするのであれば、二、三年生になるにつれて、その中でルーブリック評価とか工夫をしていけたらいいのかなと思いました。総探の件はちょっとまた、検討させていただきます。本校もプログラムを導入してまして。お金払って、業者に入ってもらってたりするんで、なかなか、総探には総探で、しなきゃいけないことがあったりとかして。本当はそうですよね。そこでコラボできたら良かったのかなと。また来年以降、検討させていただきたいと思います。

◎茅野克利先生（脇町高校）

本日はありがとうございました。大変意欲的でですね、生徒の楽しそうな様子が伝わってくるような報告で、大変勉強になりました。最後、さっきですね、先生が評価について触れられた件について質問するんですけど、「ルーブリック評価を次は用いたい。」、で最後の実践でもたれた。ただ、興味深いのは２ｐのところに、検討課題の中で、「ルーブリック評価などの制限を行わなかったために、逆に生徒の想像力が十分発揮されたのではないか。」というご意見もあって、今までの議論と重なってくると思うんですけれども、条件付けが多ければ多いほど、生徒は無理をしてしまって、楽しめない状況になる。そういう条件付けがないと、全く条件付けがないと狙っている目当てを達成することができない。そのルーブリックを用いられたところと、用いられていないところが実際あるわけですけど、まあ例えばルーブリック評価にしぼっていただいて構いませんが、ルーブリック評価を用いることのメリットとデメリットとか、あるいは難しさと手応えとかいうところがあればお聞かせください。

◎山根浩明先生

自分も、教員採用試験を受けていた時には「こういう授業したら絶対に目標書きなさい。」「一番最初に目標を書きなさい。」と言われまして、当時はわからなかったんですけれども、十年経ちまして、やっぱり、こういうルーブリックとかやってみて思うのは、今回は手引きも合わせたんですが、手引きとルーブリック使うことによって、生徒が迷わなくなります。説明がとんでしまって申し訳ないんですが、本当に総探みたいになってしまって、非常に難しかったんです。自分が徳島県の環境問題引っ張ってきて、またそれを、もちろんコ

ピーアンドペースト取ってきてするわけにはいかない。なぜかというと、言葉に制限があるので、言葉を使わなければならないという制限があるので、コピペすることができず、自分たちでかみ砕いて書いてきて、しかもなおかつ、写真や図を二つ以上使わなければいけないという制限があるので、非常に大変だったと思うんですが、一番最初に示す、また私も「ウミガメの環境」っていう、今日ですかね。徳島新聞に「ウミガメ０匹」って、今日の一面にタイムリーで、奇跡的なんですけど書いてましたが、日和佐０匹だったらしいんですけど、このウミガメのを、これを手本として示しまして、これで良かったのかなとも思っております。先に示すことで、生徒が迷わないというか、迷う人もいるんですが、ぽつぽつでも、私が行きたい方向に行ってくれたというのは非常にメリットでした。やっぱり、制限がないと『羅生門』の方、多少破綻してたりとか、意味を理解してくれない、何をしたいのかわからないという人も正直いました。「それは違うだろ。」とか、意味とかが伝わってなくて、失敗に終わってしまった人もいるんですけど、段階なのかなと思いました。最初は『羅生門』に関しては、まず「パソコンで打つ」ということが、まず最初だったんで、そもそも、パソコンも開けないとか打てない人もいて、そんな人の指導もあったので。もう三回目だったので、最後のポスターとかはルーブリックで引っ張ってこれたし、もちろん途中で、「これ貼り付けるんぞ。」とかそんなこともしなければいけなかったんですけど、やっぱりある程度、ルーブリックとかがあったほうが、放っておいても大丈夫かなと思います。作業量が多くなってくると、ルーブリックがあるといいかもしれないですね。『羅生門』は読んで、勝手に想像して書くだけで、作業量もそんなに多くなかったので、これは話し合ってなくてもできたのかなと思うんですが、非常に制限が多かったので、最後の実践に関してはルーブリックが助かったかなと思います。

《講評》

◎佐野恵里先生（学校教育課　学力向上推進室担当指導主事）

何点かお話させていただきます。山根先生、研究発表大変お世話になりました。日頃、お忙しい教育活動の中で、研究活動に取り組んでいただきましてありがとうございます。先生の発表で、書くことの資質・能力の育成を目指す授業実践について、また、生徒の語感を磨き、語彙を豊かにする取り組みを行っていく上で、ぜひ、先生方に参考にしていただきたいと思った点について述べたいと思います。

まず一点目については、書く活動を効果的に位置づけて言語能力の育成を目指した授業を展開されている点です。高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと、聞くこと、書くこと」の領域の学習が十分に行われていないことが、課題として指摘されておりました。また、これまでは、教師の視点で「何を教えるか」という観点で授業が組み立てられることが多くありましたが、新学習指導要領では、生徒の観点で捉え直し、「何ができるようになるか」育成すべき資質・能力は何かということを軸にした授業作りが必要となってきております。最初の挨拶でも述べさせていただきましたが、特に国語科では教材を教えるという発想になりがちなんですけれども、今回の取り組みは生徒の実態から実感として捉えた語彙力の育成という課題をもとに、書くことを軸にした教材や言語活動を考えて、生徒の言語能力の育成・向上を目的とした授業作りを実践されているという点が非常に示唆の多いところだと考えております。語感を磨き、語彙を豊かにするっていうのは、知識及び理解の指導事項になります。語彙・語感を磨く、語彙を豊かにするというのは知識・理解の授業の実践だけで身につくものではありません。やはり、思考力・判断力・表現力と関連付けて学習するとい

うことが大事になってまいります。今回は、山根先生は書くこと、しかも言語活動を通じて、生徒に身につけさせようということを実践されておりました。語彙を豊かにするっていうのは自分自身を取り巻く社会に目を向けていくことにもつながると思います。先生の実践を通して、生徒が「こういう新しいことが作りたい」とそういうふうに思わせられることが、非常に、今後の変化の多い社会の中で生きていく生徒の中で、非常に重要な気づきができたのではないかと思っております。それはやはり、効果的な学習活動というものが密になってまいりますので、先生が「一番最初のハードルは低く」ということで、多分設定されたと思うんですけれども、『羅生門』のリライトから始まりまして、その後、生徒の学習活動が進んでいく上で、学習段階が進んで行く上で、生徒の実態に応じて適切な言語活動を考えられて、授業の実践の中で取り組まれたということは、非常に重要な点だと思っております。そのように「言語活動もどのように設定するのか」というのが、やはり、先生方の腕の見せ所というところになってくるのだと思います。同じ『羅生門』を扱うにしても、教材としての『羅生門』ですけれども、どのような力を生徒に身につけさせるかって考えた時に、どのような切り口で、どのような言語活動を通じて、どのような資質・能力を身につけさせたいためにこの『羅生門』を使うのかと考えた時に、ほんとにさまざまな切り口といいましょうか、授業の展開が設定されると思います。生徒が身につける知識・能力として何が必要なのか、それを実際は、前にしている生徒の実態を捉えた上で考えていくというのが、非常に大事になってくると思われますので、山根先生が実践されたように、先生方も、ご自身の生徒さんを目の前にした時に、「どのように言語活動を取り入れるのか」、「どんな資質・能力を目指すのか」というところを意識していくのが大事かと思われます。

二点目になるんですけれども、生徒の学びが深まるように、学習の過程を大切にして計画・実践をされておりまして、その後、成果と課題の検証をされ、次の取り組みへとつなげていらっしゃいます。山根先生、本学会への発表二回目というふうにおっしゃっておりましたけれども、おそらく日頃から、「ＰＤＣＡの実践」をされているのではないかと思います。私自身も学校の中で、それから先生方自身も「ＰＤＣＡ」というもののサイクルを回していくということが重要ということを、わかってはいてもなかなか実践ができていないというところは実状としてある方もいらっしゃるのではないでしょうか。その中で、成果、それから課題を検証されて、次の取り組みの中に生かしていくということを繰り返していらっしゃる山根先生の取り組みというのは非常に重要なことを教えていただいているのだと思っております。目標、その単元の目標を、先ほどありましたけれども、明確に設定すること、生徒が何を、「この単元ではゴールが何か」っていうことを生徒がわかること、それから、先生が示すことっていうのは非常に重要なことになってまいります。ゴールがわからないのに、生徒が授業を受けていても、生徒がどこに向かっていったらいいのかわからない、その、どこに向かうのかの一つとしてルーブリックというのがあると思うんですけど、ルーブリック以外にも、生徒に授業の目標、単元の目標を示すやり方っていうのは可能性もあると思います。ですので、学習の手引きの作成でありましたり、評価の方法としてのルーブリック、それから今回はポスターの手本をお示しされたということでありますので、「どのようなゴールを先生方が設定されているか」、これは生徒さんに見ていただくとか、提示するっていうことが非常に重要であると思います。今回特に、意見ポスターのところで、総合的な探究の時間のようになってしまったというお話があるんですけれども、やはり、「国語科というのは、言葉による見方・考え方を働かせる、そういう科目です。」というか、そういう教科ですね。やはり今回、語彙を増やすというふうに、言葉にこだわった授業を展開されるっていうところを常に意識され

ていた点では、やはり、総合的な探究の時間になってしまったというのはあるかもしれませんけれども、やはり、国語科として非常に大事なところだと思っております。言葉にこだわる、言葉による見方・考え方を生徒として、どのように働かせることができるのかということは、国語科の大きな仕事だと思いますので、言葉にこだわった上での指導について、先生方も参考にしていただけたらと思います。もちろん、先ほど、言葉にこだわったというところで、「どこまで個別指導を必要とするのか」というあたりが、生徒のクラスの人数でありますとか、導入として使うのか、それとも最終的な作品の形成として扱うのか、というあたりでも、「どのように扱うのか」というところで、課題はあるかとは思いますけれども、言葉による見方・考え方を働かせるというところを意識していただけたらと思います。

あともう一つ、三点目としましては、ＩＣＴを効果的に活用されたという点で、授業を展開されていたという点が、非常に示唆が多かったと思います。コロナ禍でアラートもあったりとかして、話し合いであるとか、グループ活動が制限される中、というようなことがあったとは思うんですけれども、Ｔｅａｍｓを使われたりでありますとか、アンケートでＣｒａｓｓｉを使われたりとか、今までなかったアイテムを使いながら、効果的にどのように授業を進めることが可能なのかということを試行錯誤しながら実践されたと思います。ＩＣＴですので、パソコンで入力するのか手で書くのかというところで、先生方も「どっちがいいんだろう。」と思うことはあるかもしれませんけれども、書くことという中で、内容を検討したり、構成を検討したり、実際に記述を行ったり、推敲したりという書くことの知覚ということは、手で書こうがＩＣＴを使おうが、変わらない部分が多いと思います。ですから、「今回のこの授業の中ではＩＣＴを使うのが効果的なのか、それとも手で書いたほうが効果的なのか」そういったところも判断材料にされながら、どのようにＩＣＴを効果的に活用していったらいいのかというところも検討していただければと思います。

感想のようになりましたけれども、山根先生の実践は私どもに多くの示唆を与えてくれるものでなかったかと思います。今回の発表事例を参考に、各校の実情に合わせた形で取り組みを進めていっていただければと思います。ただやはり、お一人の先生が一人の力だけですべての授業を構成されたり、考えたり、評価基準を作られたりというのは、非常に負担に感じられる方もいらっしゃると思います。「資質・能力の育成のためにどの教材をどのように扱うのか、どのような言語活動が適切なのか、学習の条件をどう立て、どう評価するのか」、やはり、組織的に計画的な取り組みというのが必要になりますので、先生方におかれましては、多忙な毎日を過ごされていると思いますが、ぜひ、教科会とか、授業研究会を定期的に実施して、いろいろな取り組みを試行錯誤していただければと思います。山根先生、本当に大変お世話になりました。ありがとうございました。